

旧約聖書の児童像

三 枝 礼 三

- I はじめに
- II 旧約における関連用語
- III 古代近東における児童の状況
- IV 古代イスラエルにおける児童の状況
- V 旧約における教育の状況
- VI むすび：神学的評価

I は じ め に

甚だ個人的なことに亘るが、かつて、生前の加藤邦雄教授から「キリスト教の児童観」を共同でまとめようというお申し出をいただいた。その際、「聖書の児童観」を筆者が受けもつようにとのことであった。しかし、残念なことに、その約束を果さないうちに加藤教授は死去され、宿題だけが筆者の心にいつまでも重く残ったのである。以来、いまだにその約束を果し得る十分な用意はできていない。しかし、余りにも遷延しすぎているので、とにかく始めなくてはならないという動機だけから宿題にとりかかることにする。

とはいえ、聖書の、特に旧約の、ある整理された児童観を直接抽出することは、危険でもあるしその用意もない。そこでむしろ、一定の児童観を抽出し整理統合する前段階における素材としての生の児童像を探索することから始めたい。すなわち、旧約の児童がおかれていた宗教的歴史的社会的状況をまるごと含めた児童の姿の断片をできるだけ掘り起こして、まずそれらの断片自身に語らせることである。おそらく、その発言は種種雑多であって、容易に整理統合されることを拒み、ましてやそこから単純明快な児童観を抽出することなどゆるさないうものかも知れない。しかし、そのような諸断片の発言の多様性の中にこそ、旧約の児童像の豊かさもあるのであろう。

このような態度をもってみると、たとえば平塚益徳氏の『旧約聖書の教育思想』は教えられるところも多いが、疑問なきを得ない点もあ

る。氏によれば、知恵文学において鞭による所謂「硬教育」が推奨されたわけは、一つには「箴言に現われている児童観は性悪説であるといいうるであろう」¹からであり、二つには「いまだ教育思想、教授方法においてきわめて素朴であった古代にあっては、直接的・外形的な訓育の手段としてはこれ以外の方法が知られなかったから」²であるという。しかし、このように箴言の児童観を「性悪説」という通俗的観念で規定したり、知恵文学の教育思想・教授方法を直ちに未発達な段階として断定したりすることは、その教育学的価値観や尺度だけに基づいたささか短兵急な割り切りすぎではなからうか。むしろ、鞭による教育すら、その背景としての旧約の宗教的歴史的社会的関係の中において、その諸関係から考察しなければならないであろう。

以下は、さしあたり手もとにあるごく限られた文献を紹介しつつ、旧約の児童観の素材としての児童像の一端を報告しようとするものである。

II 旧約における関連用語

旧約の児童像の諸断片を掘り起こしこれを収集するために必要な磁石は、その磁気を帯びた関連用語である。すなわち、子ども及び教育に関連する用語である。

一般に「子」を意味する用語で頻度の高いものとして、次のような語があげられる。

まず、旧約聖書中で最も頻度の高い用語の一つ、bēnは、じつに4850回も用いられており、セム文化の最も特徴的な用語の一つとされている。¹ アラム語の bar も bēn から来た語で殆んど

I
1) op. cit. p. 129
2) *ide.* 163f.

II
1) G. Botterweck: *Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament*. E. Tr. Vol. II. 147
H. Haag, bēn

同じ用法で用いられている。ある学者たちによると、ヘブル語名詞 *ben* は「建てる」を意味する語根 *banah* (創世. 16: 2; 30: 3; サムエル上. 2: 35; 列王上. 11: 38; ルツ 4: 11) では、「家を建てる」=「一家を興す」のように用いられている。) から派生した語であり、アラム語名詞 *bar* は「つくる」とか「生み出す」とかを意味する語根 *bara'* から来た語であると考えられている。しかし、ハーグは、両説とも疑わしいとし、むしろ *ben* も *bar* も、他の関連語形同様、原形的な用語であって、いかなる語根から派生した語でもない想定の方がよいと言っている。² つまり、*bēn* と *bar* は、語源的にはまだ満足 of いく説明を見出すに至っていないのである。

旧約では、*bēn* も *bar* も、横には家族関係、縦には世嗣の関係にある者に対して広く用いられている。のみならず、さらに、二人の人物間の親密な関係もしくは二つの事物間の何らかの結びつきが持続する場合にも、その結合関係がしばしば〈父-子〉定式で表わされる。³ つまり *bēn* と *bar* は、親子の出生関係または世嗣関係における「子」とか「孫」とかに用いられるだけでなく、たとえば特定の職業⁴ や運命⁵ などというものに対するさらに包括的な社会的乃至宗教的従属関係にある者にも用いられているのである。旧約における「子」は、そのように元来すぐれて社会的な存在だったのであろう。

同種類の語をもう一つ付加えるとすれば、*yēlēd* であるが、これは「生む」を意味する動詞 *yālād* から出た語で、89回用いられている。そして、邦訳では「子」、⁶ 「子ども」、⁷ 「男の子」などと訳されている。

2) *ide.* 149

3) *ibid.*

4) 列王下. 9: 20

5) e. g. 「金細工の子」(ネヘミ. 3: 8).

「歌うたう子ら」(ネヘミ. 12: 28).

6) 「捕囚の子ら」(エズラ 4: 1).

「死の子」(サムエル上. 26: 16).

7) 創世 21: 14

8) 出工. 2: 6

9) 出工. 1: 17, ゼカ. 8: 5

以上は、おもに親子・出生・社会的従属関係にあるものとしての「子」を意味する用語であるが、そうした社会的従属関係とは一応無関係な、いわば生物学的個体としての成長過程における「子ども」をさす用語もある。しかし、このいわば生物学的「子ども」についての用語法は、旧約における人間の生の諸段階の区分方法によって規定される。

H. W. ヴォルフ¹⁰によると、旧約における生の諸段階の区分方法には厳密にいうと三とおりにくらしいある。まず、一般的な区分方法としては三段階が見分けられる。第一段階は言うまでもなく、子どもの時期で、*yōnēq* (乳呑児、申命. 32: 25), *ṭaph* (歩行できないよちよち歩きの幼児、エゼ. 9: 6), *na'ar* (少年、詩. 148: 12) 等の語が用いられる。第二段階は、若者の時期で、かなり成長した男と女をそれぞれ指す *bāhūr* と *betûlā* (申命. 32: 25, エゼ 9: 6, 詩 148: 12) が用いられる。第三段階は、大人の時期だが、これもひげのある大人を指す *zāq-ēn* (エゼ 9: 6, 詩 148: 12) 及び、白髪が生えた男をさす *l's šēbā* (申命 32: 25) と女をさす *l'sšā* (エゼ 9: 6) が用いられている。

しかし、エレミヤ書 51: 22 は、人間の生が四期に区分されると見ている。すなわち、子ども (*na'ar*) と若者 (*bāhūr* または *betûlā*) の時期の後にくる結婚した壮年 (*l's* または *l'sšā*) と老年 (*zāq-ēn*) の時期の間に区分をおく。

さらに、同じエレミヤ 6: 11 は、生を五段階に分けてそれぞれ次のように呼んでいる。すなわち、幼児 (*ōlāl*)、若者 (*bāhūr*)、男と女 (*l's* と *l'sšā*)、老年 (*zāq-ēn*)、そして非常に高齢の老人 (*melē' yāmīm*) である。つまり、老年が二区分されるわけである。

これら三とおりの生の諸段階の区分法に共通な前二段階、すなわち子どもと若者の二段階が児童期として考察の対象になることと、特に第一段階の子どもの時期にはさらに細い区分とそれぞれの呼称があることを注意しておく必要があるだろう。

10) H. W. Wolff: *Anthropologie des Alten Testaments*, E. tr. by M. Kohl p. 119-121

ところで、旧約の児童像の断片の探索収集に当って不可欠な磁石としてのもう一つの関連用語は、教育に関連した用語である。

周知のとおり、旧約において「教え」「指導」「教育」を意味する用語 *tōrah* は、「指示する、示す」ひいては「指示を与える、教える」を意味する動詞 *yārāh* から派生したとされている。¹¹ 教育は、人間による教育であれ神による教育であれ、共に旧約においては、いかに生きるべきかとかあるべき生活態度の律法に関係しており、神に対する関係の教育であると共に人間に対する関係の教育であって、同義になる。だから、Torah は「教え」であると共に「律法」なのである。「教育」を表わす現代ヘブル語 *khanok* は、「きたえる」を意味する動詞 *khānāk* からつくられたことばで、旧約ではその後期に命令形の形で箴言22:6に見出される。すなわち、「子はその行くべき道に従って教えよ (*khānāk*)」とあるとおりである。

動詞「学ぶ」の語幹は *lāmād* であって、それは「牛の鞭」のことである。¹² 牛を鞭やくびきに慣らすという意味が発展させられて、エレミヤ書2:24の *lāmād madabar* 「荒野に慣れた」におけるように、「習慣づけられる」とか「仕込まれる」とかを意味することになったのであろう。そして、それがさらに発展して、一般に「学ぶ」とか「教える」を意味するものになったのであろう。しかし、注目すべきは、「学ぶ、教える」を意味する語幹 *lamad* がウガリット語にも見出され、「学ぶ」の語幹 *lamadu* がアツカド語にも見出されると報告されていることである。¹³

後期に用いられた他の動詞 *yāsār* も、「訓練する、正す、戒める」を意味するところから転じて「教育する」になった。従って、多くの場合一定のきびしさを含んだことばとして用いられた。「これは彼の神が正しく、彼を導き教えられ

るからである」¹⁴ という一節にも見られるとおりである。

以上みてきたような関連用語の検討から言い得ることがあるとすれば、次の二点であろう。すなわち、旧約の世界における子どもはすぐれて社会的存在であるということと、その子どもらを鍛え上げる旧約の教育観の一種のきびしさは古代イスラエルだけのものではなくむしろ古代近東世界に共通の要素だったらしいということである。その意味でまず、背景としての古代近東世界における児童の状況、特にその教育状況をみておきたい。

III 古代近東における児童の状況

古代イスラエルの児童がおかれていた宗教的歴史的社会的状況は、より大規模な古代近東世界における宗教的歴史的社会的一般状況の枠組の中にはめこまれていたことは言うまでもない。旧約の児童像が、周囲の世界からどのような影響を受けているか、またそれにもかかわらず外界に比してどのような特色を帯び得ているか、それを測定するためにはまずその背景としての古代近東世界における児童の状況をいささかなりとも見ておかねばならない。

たとえば、子どもの出生について古代メソポタミヤでは、なぜ子をもうけなければならないかということについてのきわだった考え方があった。すなわち、子どもはよみにいる死んだ両親の渇きが癒されるためにもうけられるべきだという考え方である。また、乳離れの時期についても、古代エジプトの知恵の教えが、年長いた母をみとるように訓戒する際、その理由として「彼女の乳房は三年の間、汝の口にあった」³ からだと述べていることからみて、三才以上だろうと推定し得る。この両項目のうち、後者の乳離れの時期については、古代イスラエルにおいてもみられる均等な現象であるが、前者の子

11) e. g. サムエル上 12:23 「わたしは良い正しい道をあなたがたに教える」

12) 士師3:31, *malamad* 「牛のむちをもって」.

13) ホセア10:11 参照

13) IDB, Vol II, P. 27 J. kaster, Artcl. Education この項はカスターに負う。

14) イザヤ28:26

III

1) J. kaster, op. cit. p. 29

2) 「アニのエジプト人への教え」

on Hos. 1:8 cf. H.W. Wolff, Bk XIV/1:23

3) ANET, p.420, AOT. p. 28

をもうける理由の痕跡は旧約中には見当たらない。けだし、乳離れの時期の設定はすぐれて普遍的教育的領域に属しているのに対して、子をもうける理由づけはより多く特殊部族宗教的領域に根ざしていたからであろう。

しかし、ここでは、古代近東世界における児童の状況を、その教育状況だけに限って、J. カスターの報告を紹介しながら一瞥しておこう。

紀元前2,500年頃から同1,500年頃のものものと推定される「教科書」は、書記養成のための多数の学校が古代スメル王朝期をとおして咲き誇っていたことを示している。多くの出土板には、書き方の練習問題のような短い本文が、生徒自身の模写（教師による訂正つきの生徒の誤記など）と共に沢山見られる。学校生活や教員に関する報告も、ある教師たちの書き残しているそれらに関する論評から得られるのである。過去につくられた文学作品が高学年の生徒たちによって注意深く筆写され学習されたのは、そのような書記養成学校であり、多くのテキストがわれわれに伝えられて来たのはひとえにそれら勤勉な生徒たちのおかげである。

スメルの学校の主たる目的は、専門的書記を訓練して神殿、宮殿、法廷、その他当時の生活に必要な管理上経済上の多様な要求に応じさせるためであった。従って、楔形文字世界の文化的遺産はすべて全く彼ら書記たちの手を経て彼らによって伝承されたのである。教育は義務ではなく自発性に基づく事柄であった。しかも、その自発性の中には時間も経費も含まれていた。だから、当然ながら、学者が教師でもある多くの場合、かれらは都市の上層社会の経済的富裕階層の出であった。教員の中には、学校の長である *ummia* すなわち「専門家」または「教授」と、生徒のために日日の練習問題を用意してやる「助教授」とか「先輩」とかいうものがいた。興味深いのは、後期のイスラエル人たちの間で「生徒」を意味する語の一つが *banim* 「子」であったのに対して、スメル語の *ummia* の代りの他の語が「学校の父」であり生徒が「学校の子」と呼ばれたことである。他の教員は、スメル語

と習字の教師であった。また、訓練係として級長の制度もあった。教師たちは、生徒の親から徴収された授業料の中からすべて給料を与えられた。伝えられている教科書から知り得る学科内容には、当時の植物学、動物学、鉱物学、地理学等の基礎知識に相当する用語分類表、算数表、解答つき算数問題、多くの文法のテキストや辞典編集法のテキストなどの学習があった。その他、学習用、模写用の神話や叙事詩があったことは既にふれたとおりである。生徒は日の出から日没まで学校にいて厳格な訓練に服したことがそれらのテキストから知られる。教師は生徒の両親たちから非常な尊敬をもって遇された。たとえば、ある父親が成績の芳しくなかった息子の教師を宥めるために贈物をしようといかに足を棒にして回ったかを記している写本からそれが知られる。スメル人によって創設されたこのような書記学校の制度は、西アジア一帯に広く行われた。

ユーフラテスの上部流域からの報告もある。すなわち、マリの王宮には、明かに学校の教室だったにちがいない二つの部屋が発見された。その部屋は、粘土製の数列の机と腰掛でいっぱい、床にちらばっていた粘土板は生徒の書記たちがそこを使用していた証拠である。おびただしい貝がそのまわりに散乱しているのも見つかった。それらの貝は、疑いもなく、算数の勉強中数取りに用いられたものである。一般に行われていた組織立った教育の方法は、少なくともユーフラテスの上部流域では王宮付書記の知的集団をうみ出したが、メソポタミヤの文化的伝承によれば、それは紀元前2,000年から1,500年くらいまでの間のことである。

さらに、イスラエル民族が侵入する以前のカナンにおける教育制度についての確かな報告がある。すなわち、オールブライト²⁾によって報告されたシケムから出土した極めて興味深い粘土板である。彼によると、BC 1400年頃のものものと推定されている。それは、シケムの名士に宛てた彼の息子の教師からの手紙である。「三年前から今日まであなたはわたしに支払ってこられた。

1) op. cit. p. 27 f.

2) W. F. Albright. BASOR. no. 86. pp. 28 ff

——(今)あなたは送ってくださる穀物も油も酒もないのですか。あなたがわたしに支払わなかったというわたしの立腹を何とお考えですか。わたしと共にいる子どもたちは学びつづけています。——わたしは毎日かれらの父や母の代りになっているのです。』この教師は明かに正規の学級を受持っている。この親は息子の月謝の支払を停止したけれども、他の子どもたちは学びつづけ、学級は進んでいってしまったのである。従って、古代近東の正規の伝承にみられる学級教育は、イスラエル民族侵入以前の或る期間のカナン人の文化生活の態様でもあったのである。特に注目すべき事実は、これもまた同じ伝承中に見られるのであるが、教師が生徒をあたかも自分の子のように慮っていることであって、それは、「生徒」を指す用語として通常 *banim* (息子たち) を用いている旧約の用語法にひきつがれていることである。

その他、エジプトからも、学校の生活や制度に関するきれいな証拠品が出ている。すなわち、いくつかの新王朝の羊皮紙、石板、貝殻で、生徒がテキストを練習する際に用いられたものである。それらの本文の大部分は、当然ながら教訓的なものであったし、古代近東の知恵文学の伝承に属するものであった。それらのテキストはいずれも、書記の職業が古代エジプトでは非常に重んじられていたこと、またそれが報酬上も名誉上も有利な政府のあらゆる地位に昇進する登竜門であったことを示している。しかし、その栄冠を獲る唯一の方法は勤勉ということ以外にはない。教師はしばしば生徒を叩く。だがそれは、未来の書記官のためを思えばこそである。手本の手紙には、教育指導のために厳格な模写法をとる教師への感謝をこめた美しい要望と讃美がのっている。幸運と昇進を獲得する最善の方法は「ガリ勉」しかない。酒や退廃的な音楽や女友達などは慎まなければならない。これは、箴言の「ふしだらな女」に対する警告をわれわれに思い出させる。

エジプトの書記学校は神殿に付属しており、意味深いことに、「生命の家」とよばれていた。生徒は書き方——その重要な分野は筆法である

——を学び、古代の文献を学び、多くの本文の模写、手紙や教訓的文書の教えを吸収するのである。基礎コースの終りには、書記学生は官吏の身分に変わり、先輩官吏から更に教育されたり監督を受けたりする。この高等教育は——役所のさまざまな任務の教育に加えて——作文、地理、自然科学等を含んでいた。少年が祭司になることに定められていたなら、彼はさらに神学と医学を学ばなければならない。

古代近東世界におけるこのような教育制度の全体的背景と対照させて、旧約世界の生活の中の教育像を置いてみよう。すると、恐らく、メソポタミヤやエジプトの中心的大都市で達成されていたほどには周到な段階ではないとしても、旧約世界のそれが同様な伝統の中にあることは確実である。

IV 古代イスラエルにおける児童の状況

言うまでもなく、子どもは自分一人で生まれるのでもなければ、社会的真空状態の中へ生まれ出るのでもない。必ず、一对の男女、夫婦、家族、部族という共同体の中で、その共同体の中へ生まれ、育てられ、その家族乃至部族共同体の成員として育成されていくのである。従って、子どもは、出生から成長まで、その家族乃至部族を共同体として結合させ成立させている紐帯としてのその部族固有の宗教的歴史的社会的伝承や習慣によって多かれ少なかれその生存の意味や価値を規定される。事実、われわれが手にし得る古代イスラエルの子どもの関するわずかな記録も、すべてその部族共同体固有の宗教的歴史的社会的伝承によって意味づけられ価値づけられた子どもの姿の断片である。それゆえ、そのような価値づけとは無関係な純然たる生物学的個体の発達段階としての子どもの姿をとり出して叙述することは、もともと不可能であるしまた無意味でもあろう。そこで、部族共同体としての古代イスラエルの宗教的歴史的社会的価値づけによって規定されたままの子どもの諸相を段階を追って収集してみよう。

1 出 生

旧約においては、子どもは神からの最も貴重な贈物の一つであって、神から子どもを授けられるにふさわしい者たちによって獲得される最高の祝福に数えられる。「見よ、子供たちは神から賜¹わった嗣業であり、胎の実²は報いの賜物である」と詩人がうたっているとおりである。また、主を畏れその道を歩む者への祝福として詩人が「あなたの妻は家の奥にいて多くの実を結ぶぶどうの木³のようであり、あなたの子供たちは食卓を囲んでオリブの若木⁴のようである。見よ、主をおそれる人は、このように祝福を得る⁵」とうたっているとおりである。安全、富裕、長寿などの祝福と並んで、子孫の多いことはそれらの祝福に勝るとも劣らないのである。

ヴォルフによれば、このように子どもを神からの賜物として考えるべきことは、さまざまな親子関係を理解するための大前提である。夫婦の関係はなるほど、子どもをもうけることだけにその意味があるのではない。しかし、子どもを得ることは、依然として夫婦関係の本質的部分以下⁶のものではない。祭司典によれば、人類は、それが増え広がるなら、地上での人間の文化的営みを達成できるとされている⁷。ヤハウェ典によれば、アブラハムが大いなる民族になるだろうと約束された後で、アブラハムにおいて地のすべての族は祝福されるだろうという目標が設定されるのである⁸。いずれにせよ、人間の増大は神の祝福の結果である⁹。その時代以来イスラエルは、空の星や海の砂の如くふえひろがることを望んでいる。リベカは両親の家から送り出されるとき、「妹よ、あなたは、ちよろず¹⁰の人の母となれ」という希いを託されている。

IV

- 1) 詩 127: 3
- 2) 詩 128: 3-4
- 3) ヨブ 5: 25
- 4) op. cit. p. 177
- 5) サムエル上. 1: 5
- 6) 創世 1: 28
- 7) 創世 15: 5, 26: 4, cf. 28: 14
- 8) 創世 1: 28, 12: 2
- 9) 創世 15: 5, 26: 4, 22: 17, ホセア 1: 10
- 10) 創世 24: 60

ただ子どもを産むことによってだけ女性はその人生目的を達成できた。従って、子どもを産んだ女は不妊の女を蔑視することができた。男も、死亡した兄弟のために、その寡婦と結婚して子孫を興¹¹こすことを要求された¹²。

しかし、人間の計画は、そのまま当然のことのように何のあつれきもなしに実現に移されるというものではない。むしろ、子どもをもとうとする意志とそれの実現との間には相当な緊張があることをわれわれは示されている。たとえば、アブラハムとサラは、子を欲し求めていたにも拘らず、子をもうけることが全く不可能な老齢に達するまでその胎を開かれなかった。リベカの¹³不妊も、じつはイサクの特別な祈の後で解かれた。ヤコブの妻ラケルも、最初、子のないために絶望して「わたしに子をください。さもないと死にます」と叫ぶ。これに対するヤコブの答は意味深い。「あなたの胎に子どもをやどらせるのは神です。わたしが神に代ることができようか」¹⁴。バビロン俘囚の大量殺りく時代以後イスラエルの裔はもう一度ヤハウェの約束の力から生起する¹⁵。かくして、先にふれたように、詩篇127: 3では、子どもたちは一般に嗣業と同様ヤハウェからの賜物なのである。だから、子どもたちは、ヤハウェを畏れることから来る祝福だと呼ばれるのである。詩篇113篇も、ヤハウェを、子のない女たちに子を与え喜ばせてくれるものとして讃美している¹⁶。

2 幼・少年期

古代イスラエルにおいても、その母によって胎児が隣まれなかったり乳呑児が忘れられたりするなどということは考えられないことであった¹⁷。それにもかかわらず、子どもたちは、疫病等の「災いにかかるために」¹⁸生まれることが稀ではなかった。乳離れの時期が周辺世界におけ

- 11) 創世 16: 4
- 12) 創世 38: 8
- 13) 創世 25: 21
- 14) 創世 30: 1-2
- 15) イザヤ 54: 1
- 16) 詩 113: 9, cf. 詩 144: 12f
- 17) イザマ 49: 15
- 18) イザヤ 65: 23

のと同じくイスラエルにおいても三才以上¹⁹という比較のおそい時期になっているのは、疫病等の災から子どもを守るためにも必要な習慣だったのでであろう。命名に当っては、その時どきの父や部族全体に対する神の態度や関係を言い表わすために、そのよび名がつけられた²⁰。古代イスラエルにおける子どもは、そのように出生からすでに単なる生物学的個体ではなく、その宗教的共同体としての家族乃至部族の一員として生存を始めるのである。乳児は言うまでもなく乳離れするまでは母親の保護下にあって、もっぱら母親によって乳離れの用意をさせられるのが普通である。乳離れの日には祝宴が設けられた²¹。乳離れするとそれから後は、子どもたちは少しずつ順を追って教えられるのであるが、娘だけが母親の養育下におかれる。こうした配置と養育があるために、「この母にしてこの娘あり²²」というような格言が生まれたのであろう。だからといって、息子が母親の養育的配慮の一切からひき離されるのではない。かえって息子もまた、父親の教え同様母親の教えにも従うようしばしば奨められている²³。つまり、子どもたちは、日常生活技術に関しては性別に従ってそれぞれ分業的に父または母のいずれからか習得するのであるが、基本的な生き方に関する教えについては父と母の別もなければ性差も殆んどなかったと見てよいのであろう。

幼児期の大きな特徴は遊びであろう。しかし、残念ながら、子どもたちの遊びについては、ほんのわずかなことしか報告されていない。イシマエルはイサクと遊んだ²⁴。それが非常にサラの不興を買ったというたぐいの報告である。乳呑児は、這いまわり手当たり次第に土や石をつかむ。

- 19) 歴代下31:6, 第二マカベヤ7:27,
cf. イザヤ28:9 哀歌4:3f.
20) 創世4:1, 25:25-26, 29:32
30:6, 8, 11, 13, 18, 24, 41:51-52 etc.
21) cf. サムエル上, 1:21-28
22) 創世21:8
23) イザヤ28:10
24) エゼキ16:44
25) 箴1:8-9, 6:20
26) 創世21:9

そして、蝮の穴に危険がひそんでいることを知らない。もう少し大きい「乳離れした子」は、蝮がひそんでいる場所に手をさしのばし、そこを探索しようとする²⁷。それらの子どもたちがさらされている危険が克服されるのは、ただメシヤ到来の日を待たなければならない。少女たちは、縛った鳥と遊ぶのを喜んだ²⁸。としかしの少年は、弓矢で的を射る練習をしたらしい²⁹。子どもたちが街路で遊びたがるものであることはイザヤも語っている³⁰が、ゼカリヤ書8:5によると、男の子たちと女の子たちがエルサレムの街路で遊ぶその時は、救いの時代の到来したしるしである。

このように、主を畏れることへの大きな祝福の最たるものとして子どもをその指標とするのみならず、シオンへの主の還帰を象徴するのに街路で遊ぶ子どもを以てするところを見ると、子どもへの愛は古代ヘブル人の間では事実絶大であったにちがいない。

しかし、五才以上になると、子どもは労働力として大いに期待され始める。レビ記27:1-8は、生の諸段階がどのように価値づけられていたかを知らせてくれる興味ある表を提供している。その表は、明かに聖潔法の付録³¹であるが、人々がたとえばサムエルが行なったようには最早自分自身を聖別された捧げものとして聖所へ捧げたり奉仕したりしなくなってしまった後の時代のものである。すなわち、今や、かれらの労働力に対する評価額に相当する金額が捧げられたのである。

レビ記27:1-8による労働価値の評価表:

年 齢	男 性	女 性
生後1ヶ月まで	—	—
1ヶ月——5才	5シケル	3シケル
5才——20才	20シケル	10シケル
20才——60才	50シケル	30シケル
60才以上	15シケル	10シケル

- 27) イザヤ11:8
28) ヨブ41:5
29) ヨブ16:11f, 哀歌3:12
30) イザヤ11:8
31) サムエル上

この評価表をヴォルフは次のように読んでいる。すなわち、生後1ヶ月は、もっぱらその子どもが生きつづけられるかどうかを見守るための期間であった。1ヶ月後から5才になるまでは、将来の有用性に対する期待が、成人の労働力の10分の1に見つもられている。5才に達すると、その価値は早くも、その3倍または4倍の高さになる。5才以上になると、子どもは若者と同様の生産力として算定される。しかし、1ヶ月から5才まで及び5才から20才までの男女差は、それぞれ5対3または2対1である。60才以上になって、男性の稼働力が落ちる一方、家族集団内での女性の有用性が持続する結果、男女比が3対2にちじまるのに対して若年時においては男女差が大きい。

ヴォルフの言うとおりに、5才以上になると飛躍的にその労働力が高く値づもりされることと、5才から20才までの労働力としての値づまりの男女差が最も大きいことは注目に価するだろう。古代イスラエルの社会では、子どもは5才以上になると、そのように大きな労働力として評価もされ尊重もされたということであろう。

3 若 者

両親にとって、子どもらは誉であり誇であり、³³喜びであり、³⁴そして頼もしい助けですらあった。³⁵とりわけ男子は高く評価される。³⁶先に見たとおり彼らの労働力はより価値あるものとして評価されるばかりか、かれらはその父の家族集団の中にとどまり、その集団を大きくするからである。さらに、信仰深い子どもは、すでに見たとおり父親の食卓を「オリブの若木のように」³⁷囲んで、神の愛顧の確かなしるしであった。

男子は、父の家族集団に属するのみならず、すべて契約共同体としての部族の一員として加入する。その手始めの為事が割礼であった。³⁸イシマエルはその割礼を13才で受けている。K.エ

リガーは、割礼について、「多分元来は思春期に入ったときに施された一種の魔除儀式であつたろう」と述べている。⁴⁰身体的成熟は13才になると達せられたのである。⁴¹しかし、身体的には成熟に達しても、意思においては未熟なのである。若者に典型的なことは、躊躇逡巡して決断を欠くことであり、自らの任務を前にしながらその使命から尻ごみすることである。⁴³

若い娘については、何よりもまずその美しさが讃えられている。⁴⁴老人は、年老いたダビデがシュナミ人アビシャグを侍らせてそうしたように、若い娘を侍らせて暖をとることがあった。⁴⁵

「彼女は非常に美しかった……しかし、王は彼女を知ることがなかった」。若い男の容姿も、ダビデやアブサロムの場合のように讃えられることがあった。しかし、何よりもまず、「若い人の栄は、その力である」。⁴⁶青年期は、歓喜の時、熱烈に純情を捧げる時である。だが、それも主なる神が彼らと共にいます限りにおいてである。⁴⁷

以上見てきたように、子どもは神の祝福の最高の賜物とされているにも拘らず、半面では絶えず災にひんしているものである。その災は疫病だけではなく。イスラエルの背信に対する神の刑罰としての敵襲と飢餓の中で親が彼ら自身の子を喰うことさえあえてしたほどの災、また逆に子どもらが彼ら自身の両親を喰うに至るほどの災まで襲来するのである。⁴⁸子どもがひんしているそのような災をも知っている旧約世界にあっては、神からの最高の祝福の賜物としての子どものことといえども、ただ楽観的に手ばなしでめでたがっているわけではない。伝道の書の記者にとっては、子どもが沢山あることすら、

32) op. cit. p. 121

33) 詩. 144

34) 詩. 128

35) 詩. 127: 4f.

36) エレ. 20: 15, サム上. 4: 20, 創世30: 2

37) 詩. 128: 3 cf. 127: 5

38) 出工. 12: 48

39) 創世17: 25

40) K. Elliger; Leviticus p. 157

41) cf. J. Conrad; Generation pp. 9f.

42) 士師8: 20

43) エレミ. 1: 6

44) 創世24: 16, S. of S. 4: 1-7, 7: 1-5

45) 列王上. 1: 1-4

46) 箴. 20: 29a

47) 伝道. 11: 9, エレミ2: 2, エゼ16: 43

48) ホセ. 9: 12f

49) レビ26: 29, 申命28: 53-57, 列王下6: 28f

エレミ19: 9

50) エゼキ. 5: 10

そのこと自体の中に価値があるのではない。「たとい人は百人の子をもうけても……その心が幸福に満足しないなら、わたしは言う、流産の子はその人にまさると⁵¹」。

子どもは、主の道を教えられ、それを理解するために必要な知恵を与えられなければならないのである。しかも、それはまず誰よりも両親の責務であった。かくして、主を畏れる知識と知恵が子どもに与えられるとき、同じ伝道の書の記者は言う。「貧しくて賢いわらへは、老いて愚かでもはやいさめをいれることを知らない王にまさる⁵²」。

このように、子どもがほんとうの意味で尊重されている社会にあっては、これらの子どもに対するきめこまやかな育児と教育が両親の最も重要な役割と見なされていたのは当然である。そして、主への畏れを習得してついに義を得るに至る道であった知恵は、最高に尊ばれ、人間としての達成に不可欠な最適のものとして尊重されたのである。

V 旧約における教育

前節の結びでも見たように、児童の状況とは結局するところ教育の状況である。そうであればこそ、古代近東世界における児童の状況を見たときにも既にその教育の状況を見たのである。それに対比される古代イスラエルにおける教育の状況はいかなる様態を呈しているであろうか。ここでもおもにカスターの所説を紹介しつつ私見をはさむことにする。

1 旧約にみられる教育目標

古代イスラエルにおける教育の総括目標は二重であった。すなわち、a) ヘブル民族国家の歴史的遺産——神がその民と締結した契約の物語やその後の歴史においてその契約が実効を現わした部族物語など——を継承することであり、また、b) 倫理的生活態度の教育——地上における最高の幸福を得るためにいかなる生き方をすべきか——を継承することである。旧約聖書の

証言によれば、第一の目的はイスラエル国家の成立期に強調されたが、それは、新国家の後継世代が、神との契約締結によって基礎づけられ民の良心の堅固な土台の上に新国家をうち建てたその時代の生き活きた歴史的記憶によって養われるためであった。国家が確立され、王国が一時期組織的に機能していた王国後期には、第二の要素すなわち地上的幸福に至る方途としての具体的な倫理的一神論の要素が、周知のとおり、箴言など知恵文学において強調され体系化された。しかし、それより早い時代といえども、倫理的生活態度を重んじる教えが極めて重視されていたことは、モーセ五書全体に亘る特定の箇所、もちろんとりわけ十戒によって明かである。

ヘブル人は、彼らの子どもたちに、エジプトにおける奴隷状態からイスラエル民族が贖われ遂にカナンへ入ったという強烈な思い出を、子どもたちの興味をそそるような最も効果的な方法で教えることを非常な喜びとしていた。ヨルダン川から取ってきた12の石を立ててから、ヨシアはイスラエルの民に言っている。「後の日にあなたがたの子どもたちが、その父に『これらの石は、どうしたわけですか』とたずねたならば、『むかしイスラエルがこのヨルダンを、かわいた地にされて渡ったのだ』と言って、その子どもたちに知らせなければならない²」。過越の犠牲や種入れぬパンの食事は、子どもたちをつき動かして、なぜこんなことをしてきたのかと尋ねさせるように役立てられるべきである。のみならず、イスラエルの父親は、その子どもに彼らの歴史的宗教的象徴を教えるように命じられているのである³。このエジプトからの解放と神がイスラエル国家を建て且つ守るために示した偉大な奇蹟の活きた思い出は、第一共和政の後期に至るまで、初等教育の教材として用いられている。申命記の各所に、出エジプトに関連し

2) ヨシ、4: 21 f

3) 出エ、12: 26 f, 13: 7 f, 14

4) カスターはイスラエル史をバビロイン俘囚によって二分し、俘囚前を第一共和政期とよぶ。因に申命記の成立年代はBC. 700-622とされている。

51) 伝道6: 3

52) 伝道4: 13

V

1) op. cit. pp. 29-34

た定めとおきてを想起するよう命じた同じ様な命令が見出される。

倫理的遺産を継承する教育目的は、すでに創世記の中に簡潔に述べられている。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」⁶。正義と公道は、出エジプト記20：1-17の十戒の中に具体化されており、レビ記19：2の「あなたがたの神、主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」という章句において宗教的な基礎づけを与えられている。この冒頭の句のすぐ後に、また同じ章の他の場所にも、両親への尊敬を重んじること、貧しい者と寄留者のために落穂を残すこと、また盗み、不正、偽り、偽証、隣人や下僕や身体障害者などに対する虐待等の禁止がつづいている。また、人間相互間の倫理的関わり方に関する指示及び老人への尊敬、旅人への愛など、公正な良い社会をつくり出すためのさまざまな戒命が含まれている。これらの社会正義の観念は、神の聖性と深く関わっているし、またそれから生じたものである。のみならず、この神の聖における交わりと神への愛こそ、神の独一性ととともに、申命記でイスラエル人がその子らに教えるよう命じられている教えの鍵である。これら倫理的・道徳的教えへの服従こそ、箴言1：7で「知識の始め」と考えられている「主への畏れ」の実践であり、地上的幸福への方途であろう。

教育の手びきを含む書『箴言』は、後期からは、古代近東の知恵文学の中に多くの類似物をもつ第三の教育目的を包含する。それは、日常生活における実際の態度、いわば処世術の教育——いかにして同輩や目上とつき合うべきかと、いかにして面倒から身を守るべきかといった教育である。箴言の金言や格言の多くは、「適

応 (ADJUSTMENT)」という現代の教育専門用語にぴったりの教えとしてひびく。基本的な行儀作法と交際術の教えは、エジプトの教育の大部分を占めていた¹¹。それが、実際上のことを考慮して古代イスラエルの教育の中にもとり入れられたのである。分別ある性生活のための教育もなおざりにされなかった。教育の体系的教科書として箴言は、教育をよい生活のために不可欠なものとしてその重要性を強調する。実際問題としても、知恵は命そのものと同一視されている。なぜなら、義に至る原理と社会的適応の処世術との両方の知識を併わせて包含する知恵は、命の泉であり、肉なる人間存在全体の癒しだからである。教育の目的——すなわち、正義と公正と公平の教訓を受け、賢く振る舞う思慮と慎みを得させる指導を受けるようにという——は、箴言そのものの緒言に述べられている¹⁵。学びつづけること——学習は生涯に亘って継続するものであるという事実——もまた強調されている。賢い人、さとい人は常にその学習と技術において進歩することができる¹⁶。最後に、後期においては、学習における喜びが学習の窮極である。学びにおける幸福が命である。すなわち、真の幸福は、昼も夜も主のおきて（教え）を思念することの中で得られるのである¹⁷。

2 旧約にみる古代イスラエルの教育史

旧約聖書によると、子どもを教えるのは、少なくとも幼少の期間は一家の父親の義務である。出エジプトの原初の記憶と神への畏れは、子どもたちの前で語り継がなければならない。アブラハムは、彼の子どもたちのみでなく全家族に対して主の道を教えるべきものとされている¹⁸。シエマ（申命記6：4-9）、すなわち十戒に次いで五書中最も重要な教訓集は、イスラエルの

11) cf. Amen-em-ope, Ptan-Hotep, Ka-Gemni.

12) 箴言5：3-21

13) 箴言4：23

14) 同14：27, 8：35, 10：16, 11：30, 12：38

15) 同1：2-4

16) 同1：5

17) 詩。1：2

18) 出エ。10：2, 12：26f.

19) 創世18：19

5) 申命。4：9-10, 6：20f, 7：17-19, 32：7

6) 創世18：19

7) レビ19：32

8) 同 19：33f

9) 申命6：2

10) cf. 同9：10

民一人一人に、神のことはを努めてその子らに教えるよう命じている。人がその父から受けた宗教的遺産をその子らへ伝える義務は、第一共和政時代の後期を通じて一番重要な義務と認められていた。しかし、遺産を受取り、それをまだ生まれていない世代へ伝達するというこの教育的伝統継承の原理は、神によって命じられた教育綱領として結晶させられた。²⁰第二共和政時代を通じて、幼少の子は知恵のことはに対する手びきと畏敬とをその父から教えこまれた。²²

しかし、初期においてさえ、神に仕えさせるため子どもを献身させるならわしがあったようで、サムエルの場合が典型的なように子どもは乳離れさせられると直ぐに聖所へ連れていかれたらしい。サムエルは、エリからたんに一般教育を受けたのではなく、主の前での務めを果たすために必要な専門的な教育を受けたにちがいない。しかも、サムエルの場合特殊だったと断定し得る根拠はない。むしろ、サムエルはレビ族の人間でなくエフライム族だったのだから、聖所での奉仕のために子どもらを献身させることは一般的慣習であって、その際子どもたちは彼らの周囲が与え得る限り、多分エジプトの神殿学校で子どもたちが受けた教育と類似の最高に進んだ教育を受けたろうということは、大いにあり得ることである。

年少の頃は、子どもは家族の日常的仕事のために訓練を受ける。たとえば、羊飼いとかが畑仕事とかいった仕事である。少なくとも、数例の証拠によれば、まだ若者だったのに琴の名手だったダビデの例が示すように、芸術的訓練もおざりにはされなかった。音楽と共に舞踊も教えられたが、明かにどの時代のイスラエル人もそれらの芸術に対する鋭敏な趣好をもっていた。²⁶造形芸術——特に鍛冶職や銀・銅細工人の技芸——は非常に尊重された。熟練の芸術家ベザレ

²⁷ルは、彼の魂をその技能に必要な知恵と知識で満たしてくれる神から直接靈感を受けている。しかもその関連で特に重要なことは、神が彼の魂を燃やして彼の技芸を他の人々にも教えさせることである。

女子は、菓子づくり、²⁸つむぎ仕事、編み物といった家事の技能を学んだ。正規の学校が既に存在した第二共和政時代にも、学校は勿論ただ男子に対して開かれていただけなので、女子は家庭に留まってさまざまな家事に関する技能を学んだのである。³⁰一家に男の子が一人もいない場合は、娘たちが羊を放牧したり水を飲ませたりするような男子の仕事をしたようだ。³¹女性の中にあっても或る人々は、比較的に良い教育を受けた結果女子言者になったが、無論予言者になるためには、イスラエルの過去の歴史と同時代の出来事との双方に関する的確な知識を二つながら備えていなければならなかったのである。初期におけるその一例は、言うまでもなく、デボラである。³²第一共和政時代（俘囚前）の後期には女子言者ホルダ³³がいる。また、既にふれたように、箴言においては、教えを施すことにかけては母親は父親と対等の重要な存在として注目されている。その同じ異色の書には、マッサの王レムエルがその母から受けた知恵の集成がある。³⁵それは、いずれにせよ、イスラエルの歴史過程の中で、知恵の伝承に当っては、知者の役割と類似の役割を女性が演ずるほどに、程度の高い教育を彼女らが授けられていたことを示していよう。上流階層、特に王族の間では、乳母や守役が臣下としての他の務めと共に、王族としての責任を教える任務をも負っていたことが報告されている。³⁶それらの乳母や守役にもま

27) 出エ. 31: 2, 36: 1, 2, 37: 1, 38: 22

28) サム下. 13: 8

29) 出エ. 35: 25 f.

30) 箴. 31: 13-31

31) 創世. 29: 6, 出エ. 2: 16

32) 師士. 4: 4f

33) 列王下. 22: 14-20

34) 箴. 1: 8, 6: 20

35) 箴. 31

36) ルツ. 4: 16, サム下. 4: 4

列王下. 10: 5, -イザヤ. 49: 23

20) 詩. 78: 3-6

21) バビロン俘囚後の時代をカスターはそう呼んでいる。

22) 箴. 4: 3f

23) サム上. 16: 11

24) 列王上. 4: 18

25) サム上. 16: 15-18

26) 士師. 21: 21, 詩. 137, エレミ. 31: 13, 哀歌. 5: 14

して、異邦の王宮に捕虜として仕えていた少女は、イスラエルの主とその予言者の力に対する信仰の知恵において、不信仰ゆえに難問の前に³⁷恐れおののいた王よりはるかに優れていた。³⁸先にみた賢いわらべを賞讃する伝道の書の一節の女性版と言ってさしつかえないだろう。

ゲゼルの暦は、初期王政時代の中央パレスチナ農民間に行なわれていた教育について、極めて興味深い詳細な事情を提供している。その暦の粘土板は、オールブライトが外的及び内的証拠に基づいて年代決定をし、碑銘比較によっても支持されているところによれば、紀元前10世紀の後半に属するものである。ちょうど12才の少年の手に持ちやすい大きさの小さい石灰石の板が実は就学児童の筆記用の石板であって、それは再使用のためにひっかいてきれいにした跡が両面についていることから見ても明かだ、とオールブライトは指摘した。なお、パレスチナ地方の年間農作業の月割を簡潔にうたっている一種の数え歌のような本文そのものは、当然ながらリズムカルで記憶用にできている。成熟した農夫にはそのような仕掛は必要ないだろう。だから、「7月には30日ある……」というような石板上の本文は、古代イスラエルの子ども用のテキストであろう。オールブライトは、さらにそれが、口授を子どもが書取ったものだということを指摘している。従って、ゲゼルの石板はイスラエルの王政の初期には農民たちの間にすら、記憶法のような基本的教育方法の利用や指導上の一方法としての口述筆記の導入によって読み書き能力が滲透していたことを示す考古学的な立派な証拠である。⁴⁰

サムエル記上にある予言者の友がらまたは集団に関する叙述は、ある学者たちに、組織された教授団をもつ「予言者学校」が実在したと推論させることになった。無論、そのような推論はいかなる方法でも検証され得ない。しかし、そこには少なくとも、それらの弟子たちに伝達

された知識または技術をもった一定の集団があったことを推測してもさしつかえないであろう。なぜなら、予言を語ることは、イスラエル王国の成立当初には、はっきり成立した職業だったように見えるからである。

ヤハウェ予言の伝承が王政期に確立された時、予言者たちはまちがいなく弟子集団を持っていた、彼らに教えていたようだ。⁴¹イザヤは、lamodim（「弟子たち」）という語を用いているが、それは既に見たように、生徒または弟子たちを表わす慣用語の一つである。エリヤの弟子で後継者となったのはエリシャだが、かれは明かに、卓越した予言者の卓越した生徒だった。なぜなら、ベテルには「予言者の子ら」とよばれる大集団があったことが報告されているからである。これら「予言者の子ら」は、明かにエリシャを非常な敬意をもって注目しており、エリヤが移されて後は、エリシャを彼らの主人と認めた。⁴⁴「子ら」またはbanimは、既に指摘したように、「生徒」を意味する慣用語である。かれらの主人としてエリシャは、死んだ弟子たちの妻子の福祉に責任を負ったが、飢饉の時には弟子たちのために食糧を用意する心配もしたらしい。⁴⁷興味深いのは、予言者たちが指示を与える際に持っていて、その弟子たちに伝えられた一連の科学的知識のうちに、毒草及び解毒剤の知識があったことである。⁴⁸これは明かに、当時の医学知識に関する彼らの一般知識の一部であった。⁴⁹これらの医術は、古代近東世界の一般教養に属していたものであり、エジプトやメソポタミヤの神殿学校においてと同じく、古代イスラエルにおいては祭司と予言者の両者によってその生徒らに教えられた。

予言者たちが、彼らの弟子の小集団を教えて高度の技術を要する職務のために訓練したよう

37) 列王上. 5: 1-7

38) 伝道 4: 13, cf. 前IV章結び

39) op. cit. pp. 16 ff

40) サム上. 10: 5, 10, 19: 20

41) イザ 8: 16

42) 列王上 19: 16

43) 列王下 2: 3 ff

44) 列王下 2: 15

45) 第二章参照

46) 列王下 4: 1-2

47) 列王下 4: 38

48) 列王下 4: 39-41

49) 同 4: 19, 4: 32-35

に、祭司とレビ人は、彼らの同業の成員を訓練した。中でもレビ人は、イスラエル宗教の教育面において、民衆指導の責務を大巾に遂行した。モーセの祝福の中で、レビ族は、民衆を教えさとするものとして指名されている。「彼ら(レビ人)はあなたのおきてをヤコブに教え、あなたの律法をイスラエルに教え、薫香をあなたの前に供え、燔祭を祭壇の上にささげる」⁵⁰。レビ人の法規によれば、アロンの子らの普遍的責務の中にはイスラエルの民を教化せよとの命令があった⁵¹。この祭司職の機能は、第一共和政期の末期まで極めて重要なものとして持続した。すなわち、ヨシヤパテは、律法の書を教材として民を教えるために、祭司とレビ人をユダのすべての都市へ派遣して、巡回させた⁵²。ヨシヤ王の統治下においては、民衆を教える任務は、レビ人の責任に属しており⁵³、その時期から以後にかけて、そのようなレビ人の職務は予言者たちによって承認された⁵⁴。レビ人は、ユダの地方貴族で所謂アムハアーレッツの指導者とされているが、社会的にはレビ人自身、ゲーリーム(土地定住性を欠く寄寓者層)とされるほどユダの町々を巡り歩き、イスラエル契約共同体の公的祭儀から不浄な者として除外されていた大衆庶民層のために魂のみとりと罪の懺悔行事とに当り、トーラーの合理的知識に基づいて庶民層の倫理的生活の指導に当たったのである⁵⁵。とはいえ他方祭司も、狭義の祭司としての公務だった祭儀のほか、その職責とは関係なく、自発的に民衆を教えていたようで、その教化のために報酬を受け⁵⁷ることは咎めらるべきことと考えられていた。教授方法は、明かに、さまざまな町を周期的に訪れ、イスラエル人と非イスラエル人の別を問わず全住民と一緒に集め、彼らにトーラーを解

き明して聞かせる方法である⁵⁸。このレビ人の教育的機能は、捕囚からの帰還後まで続いた⁵⁹。しかも、明かに彼らレビ人は、トーラーの釈義と解き明しに熟達していた⁶⁰。彼らはmabinim(字義通りには「さとりを得させる者」⁶¹)と呼ばれた。

ベルシャ時代には、エジプトのエレファンタイン(ナイル中流)のユダヤ人間に、箴言に類似した訓戒の手びきのあったことが知られている。すなわち、「アヒカルのことば」である。この著作は、箴言もその一部である古代近東世界の知恵文学の古い伝承中に属するものであって、この知恵文学の存在は、自らの知識を以てその弟子たちを教えた教師らがいたことのしるしである。アヒカルの中の箴言本文の冒頭に次のような託宣がある。「压榨機の中で泡立つぶどう酒よりも強いものは何か。教え鍛えられる子どもである」⁶²。この「子ども」は、箴言におけると同じく、「生徒」の代りの古い慣用語であって、容赦ない鞭の助けによって彼らの金言を学びつづける生徒たちのことであることはまちがいないであろう。

イスラエル本土においては、捕囚からの帰還後暫くは、教材のトーラーは祭司の責任において管轄されていたらしい。既にみてきたように、蓄積された伝承を民衆に解き明かすことは、祭司とレビ人の最も重要な機能の一つであった。また、聖務のこの面は、最重要な職務となって、名実ともに神政政治を保っていた第二共和政時代には行政府に所轄庁をもつに至り、ヘロデ大王の時代にまで及んだ。イスラエルの民族的文化的大復興は、エズラとネヘミヤによって指導された。エズラは自身祭司であったし⁶³、明かにトーラーの知識にも教授法にも精通していた祭司集団の一人であった⁶⁴。エズラは、民衆の教師としての祭司の伝統を自らにひき受け、バビロ

50) 申命33:10

51) レビ10:11

52) 歴代下. 17:8~9

53) 歴代下. 35:3

54) マラキ 3:11

55) ゼリン・ロスト「旧約聖書緒論」(関根訳) p. 83

56) 内田芳明、「旧約宗教と社会層」(関根・内田共著「旧約宗教の社会学的背景」p. 89-138)

57) ミカ 3:11

58) 申命31:10-13, 歴代下17:8-9

59) ネヘ 8:7-9

60) 同 8:8

61) ネヘ 8:7, 9 エズ 8:16

62) Col VI, II. pp. 79-80, Sachau, pl.44, Text in Cowley, in tr., p. 222

63) エズ 7:1-5, ネヘ 8:2

64) エズ 7:6, 10

ニヤから携え帰ったトーラーの写本を帰還した捕囚らの集会の前で解き明した。この集会の中には、既述のとおり mabinim⁶⁵の名称で呼ばれる教師のレビ人たちもいたが、彼ら自身の知識をも更新するためであった。エズラは、人々より高く「木の台」⁶⁶の上に立って彼らに読み聞かせたが、その周囲には、彼の助手たちや、教えるレビ人たちがいて、彼の解き明しを助け、全会衆が理解できるよう明快に細部に亘って解説した。恐らくこれと同じような仕方でも、第二共和政時代の次の時代にも終始、トーラーは月曜日と木曜日に解き明されたのであろう。パレスチナの都市においては月曜日と木曜日が市場の開かれる日で、そこに集まる人々に律法を読み聞かせ解き明すのに便利だったからである。後には、トーラーが三年間の周期で読みとおされるように、章を追って継続的に読む方法が考案された。史上最初の成人教育の大規模なプログラムはこのようにして始まったのである。

続く時代には、祭司集団の高位者たちはだんだん政治の中に巻き込まれ、他の祭司やレビ人も神殿奉仕の複雑多岐に亘る業務に忙殺されたために、トーラーの研鑽と解き明しとはもっぱら soperim(「書記たち」)として知られる人々の集団の手に委ねられることになった。彼らの職務は第一共和政期の初頭にまでさかのぼるが、その時代には彼らは、軍司令官や祭司長らと並ぶ王国の高官の中に数えられていた⁶⁸。彼らの主たる機能は、明かに秘書官的なものであって、外交文書の作成や王国の年代記の編集に責任を負っていたようだ。このような書記官の尊重されぶりの中に、エジプトの行政組織からの影響が歴然と見てとれる。エジプトの行政組織の中では、書記官の職務は非常に高く評価されており、彼らのある者は軍司令官になり、ホレムヘブ(Hor-em-heb)の場合のように彼ら自身王にさえなった。そのように、ウジヤ王治下では、書記エイエルのことが軍司令官と共に言及され

ており、歴代志下26:11はエイエルを司令官そのものとして名指していると解釈できる。多分、書記の多くはレビ人であった。彼らは普通、書記と教師両方の職責を当然のように結合した。かくして彼らは、トーラーとその解説との統轄者となった第二共和政時代の最終的書記制度の祖としてその役割を果たしたのである。かくて第一共和政の年代記によれば、レビ人シマヤはダビデのもとで書記として仕えた。また、ヨシアに仕える書記だったレビ人たちの一団のことも言及されている⁷⁰。第一共和政時代においても既に書記たちは学識と知恵とに熟達したものとて言及されているのである。ダビデの叔父ヨナタンは、相談役であり、「さとりの人」(mabin, 「教師」の代りの慣用語の一つ)であり、そして書記であった⁷¹。エレミヤの秘書であり弟子であり、従って「予言者の子ら」⁷²の一人であったバルクもまた書記であった。第一共和政の末期には、書記たちは、既に専門階級として認められており、彼らはトーラーの教養ある管轄者として目されている⁷³。エズラが登場してきたのは、イスラエルの知的遺産を担っている書記的レビ人祭司たちの伝統的枠組みの中からである。彼は、後期のユダヤ文献においては、「書記エズラ」として知られ、「モーセの律法に精通した書記」として紹介されている。エズラの時代以後、書記は、聖書の学者・解釈者という専門階級となり、且つそのようなものとして人々の公認の教師、霊的指導者として認められた。

ミシナに記録されている伝承によれば、イスラエルの文化的遺産の豊庫である書記たちは、第二共和政時代の初期には、「大集会の人々」(‘hanashi kanasat hagadola)として知られていた。おそらくそれは、彼らが捕囚からの帰還時に民の大いなる集会の前でトーラーを解き明したエズラと彼の書記たちに由来しているその来歴の故であらう。完全に教訓的なミシナ中の小

65) ネへ 8:3, 9(MT, RSV)

66) ネへ 8:4

67) 同 8:7, 9

68) サム下 8:17

69) 歴代下34:13

70) ibid.

71) 歴代上27:32

72) エレ36:26

73) エレ 8:8

74) エズ 7:6, 11, cf. ネへ 8:4, 9, 13

冊子アボスによれば、その「大集会の人々」は、トーラーの管轄者としての予言者らの直接の子孫であって、エズラ・ネヘミヤ時代とアレキサンダー大王時代の間に活動した。箴言の「賢い者」はそれらの書記だったにちがいない。また、旧約の知恵文学を準備して編纂したのも多分彼らであって、教育者としての彼らの役割はその著作物に強く影響を及ぼしたであろう。たとえば、箴言 *passina* では、「賢い者」は「教師」であり、「子」は「生徒」である。箴言は、書記の教育方法及び教育態度と、古代近東世界の教訓的伝統中にある彼らの学校で教えられた主題内容の大部分、その両者を併せ概括したものである。書記たちは、セリウカスの時代からマカベヤとローマの時代を経てミシナの完成される時代（紀元200年頃）に至るまで次々と非常に栄えた一連の律法学者たちの前身であった。従って、約二世紀の間、「大集会の人々」からなる書記たちは、徐々に聖書釈義の方法と当面の急務に対する律法の不断の適用方法とを併せ構築してミシナの恐るべき構造をうみ出したわけである。このことは当然、多かれ少なかれ正規のトーラーの教育制度があって、学者世代がその蓄積された知識を弟子たちに伝達し、弟子たちが順次学者になっていったということを予想させる。冊子アボスの冒頭には、「大集会の人々」の最も重要な三つの金言が記されている。すなわち、「判断において慎重であれ。多くの弟子たちを養い育てよ。律法（トーラー）を守護せよ」である。このような、彼ら書記たちの働きに関するこの簡潔な要約の中に、当時の日常生活に律法を当てはめるための慎重な検討と解釈を指示する命令と共に、遺産を弟子たちに伝達する教育手段の確立がうたわれている。彼らの後継者は、義人シモンを筆頭とする一連の書記たちであった。⁷⁵アボス中のシモンの教訓には、学びの家の雰囲気がいっぱい溢れている。「学びの家」という用語そのものは、*ECCLESIASTICUS* の最終章に見出される。⁷⁶しかし、これが、後にユダヤ

教の基盤の一つとなった制度に関する最初の言及である。

ヨセファスは、長期に亘る制度としての初等教育について語っている。かれは、児童教育のよりどころとしての権威をモーセの律法から導き出し、⁷⁷児童教育に対するユダヤ人の並々ならぬ心づかいを強調している。教育は子どもがものごころつく⁷⁸と間もなく始まる。⁷⁹フィロは、ユダヤ人たちが非常に若い時から律法の知識を教えこまれること、いわば「うぶ着のとき」から⁸⁰教えられることを述べている。第二共和政の後期を通じて、読み書きの力は完全に普及して、⁸¹律法の書は個人の家の多くに見出された。学校での児童教育は、読み方の指導で始まり、次いで原典そのものからトーラーを学ぶことになっていたようだ。ヨセファスは、かれが14才のとき、エルサレムの高位聖職者や主だった人々でさえ、トーラー解釈の実際を諮問するために彼を訪れてきたほど律法の深い知識を持っていたと⁸²誇ることをためらっていない。

学校委託制度の確立は、ラビ文献ではパリサイ人に帰せられた。パリサイ人は、サロメ・アレキサンドラの治下（76-67 B.C.）での彼らの召還以来、都市住民の大半に及ぶ広範な民衆の支持を得た。⁸³シエタの子シモンの指導のもとに、彼らは、人々の間に彼らの教えを普及させる知恵を体系的な形で把握した。子どもたち（字義どおりには「幼児たち」）は初等学校（*bith-hasaper* 「本の家」既ち、トーラーの家）に出席すべきであると定めたのもシモンであった。⁸⁴小学校では、トーラーが、教科書だったが、口伝律法にもとづく解釈と解説つきであった。すなわちトーラーに関する規範的注解と説教とのほう大なその本文は、第二共和政時代に書記たちのもとで蓄積されてきたものであり、またパリサイ

77) Antiq. iv. viii. 12, Apion II. XXV.

78) Apion I. Xi

79) ide. II, Xix

80) Leg. ad Caium 31

81) 第1 マカベヤ 1: 56 ff.

82) Vita, 2

83) Simon ben Shetah

84) Jer. keth. VIII. 11

75) BC. 280(ca) Josephus, Antiq. XII, ii. 5

76) Ecclesiasticus または「シラクの子イエスの知恵」

51: 23 NEB "house of learning"

派の教えの根拠であった。これらのパリサイ派学校の最初のもはエルサレムに設立され、その法式はやがて他の地域の中心都市に普及した。神殿崩壊の数年前、ガマラの子ヨシア⁸⁵は、子どもたちのための教師がすべての地方すべての町々に派遣さるべきことと、子どもが6才か7才で入学を認めらるべきことを制定した。子どものための教師は khazen であって、明かに読み方の指導とをもって一般の種類の職務とを兼ねるいわば雑役夫であった⁸⁶。

成長盛の有望な若者たちに対する中等及び高等教育は、bith-hamidarash（尋ね求める者たちの家）でつづけられた。そのいくつかは、偉大なパリサイ派の教師たち自身によって指導されていた。教師としての名声を博したそれらの或る者とヒルレルは、バビロンからやってきてシェマヤとアブタリオンの学校で律法の研究を深め、やがて自らの律法解釈の方法を確立して弟子たちの教育をひきついだ人々である。bit-h-hamidarashは、じつにシナゴグよりもっと聖なるものと考えられていた⁸⁷。若い学生たちは、パリサイ派の賢者らの指導のもとに、トーラーの解釈や、ギリシャ・ローマ時代における激変したパレスチナの生活に対するトーラーの教えの適用について討議した。これらの討議と「構義ノート」こそ、規範的ユダヤ教の拠りどころとなったミシナへと次第に成長していったものである。成熟した市民大衆のためには、既にふれられた「成人教育」の正規の制度があって、そこではトーラーが週一度学習された。ヨセファスにとって、それは既に周知の慣習であった。

3 旧約における教育学

予言者及び、既述のとおりイスラエルの教師となった書記によって記録された文書の集成としての旧約聖書は、明らかに暗示的にか、おのずとその教育論と教育観を表現せずにはいられない。それゆえ、旧約本文の検討から、その教育観と教育方法との双方に関する或る刻印を得ることはできよう。

まず、教育そのものは、神によって命じられた使命として尊重されていた。さらに、すべての教師の原型は神ご自身であった。神は、モーセを通して、イスラエルの聖なる教師である。モーセは言う「イスラエルよ、いま、わたしがあなたがたに教える定めと、おきてとを聞いてこれを行いなさい⁸⁸」。また言う、「見よ、わたしはわたしの神、主が命じられたとおりに、定めとおきてとを、あなたがたに教えた⁸⁹」。教育課程の発端には聖なる領域と権威とがあったのである。神ご自身がモーセの教師である⁹¹。モーセが使命受諾に当って抗弁したときですら、神はかれに語っている。「わたしは……あなたのなすべきことを教えよう⁹²」。同様に、神がその民に怒を発するとき、ただ教師としてのみその民に怒を発するのであり、民を罰するときですら、神はなお彼らに近くいまし、かれらを正しい道へ導き給うのである。「たとい主はあなたがたに悩みのパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れることはなく、あなたの目はあなたの師を見る⁹³」。同様の感覚がヨブ記36：20にも見出される。「見よ、神はその力をもってあがめられる。だれか彼のように教える者があるか」。人は神に教えを求める。「わたしが自分の歩んだ道を語ったとき、あなたはわたしに答えられました。あなたの定めをわたしに教えてください。あなたのさとしの道をわたしにわきまえさせてください。わたしはあなたのくすしきみわざを深く思います⁹⁴」。主は「人に知識を教える者⁹⁵」である。さらに将来、神がシオンを復興されるときには「あなたの子らはみな主に教えをうける⁹⁶」という万人教育の願いの最初の表現すら現われる。

ところで、古代近東世界のあらゆる教師につ

88) e. g. 申命 4：7 cf. H. Barion, Pädagogik, III, Theologisch, 4 (RGG, Bd. V. s. 17)

89) 申命 4：1, Piel 動詞 *malamad* 「教える」が用いられていて、「命じる」ではない。

90) 同 4：5

91) 出エ 4：12

92) 同 4：15

93) イザ30：20

94) 詩119：26 f.

95) 詩94：10

96) イザ54：13

85) Joshua ben Gamala, Baba Bathra 21a

86) Shabbath I. 3



87) Megillah, 26b-27a



いて言えることは、懲罰が教育には不可欠の随伴物だということである。「もろもろの国民を懲らす者は、罰することをしないでだろうか。人に知識を教える者も……。主よ、あなたによって懲らされる人、あなたのおきてを教えられる人はさいわいです」。⁹⁷語幹 yamar と lamad の対句法は、懲罰を暗示する一定の身体的力をもってする「教える、指導する、訓練する」というエジプト語の動詞語幹にその原型をもっている。

しかし、鞭の使用は必要であるにも拘らず、教育は冷静な抑制をもってなされるべきである。なぜなら、「静かに聞かれる知者の言葉は、愚かな者の中のつかさたる者の叫びにまさる」⁹⁸からである。

加えて神は、聖なる教師として、人々に知識を分け与えるのみならず、また彼らがさらに教える者になるよう神の霊と教え得る力を満たして高揚させたもうのである。従って、教育を所轄する行政機関は、実際には聖なる機関であって、万人から全幅の尊敬をもって重視されていたらしい。二つの共和政時代を通じて、児童教育は、明かに乳離れして間もない時期と思われる非常に早い年齢時から始まった。⁹⁹ヨセファスの証言によれば、子どもたちの教育は意識の最初のひらめきから始まるということが、かれの時代にはもう古い古い伝承であった。実際の教育は、朝非常に早くから始まった。¹⁰⁰イザヤとエレミヤ両者の言い分をみると、共に神が早朝教えを与える模範的教師であると言っていることは注目に値する。児童教育を可能な限り早期に始めることと、気分が新鮮な朝の時間を利用することとの二点は、教育学の二つの基本条件として万人に認識されていたのである。

子どもにはその都度、そのつど少しずつ教えるべきだという公理も、この教育の根本法則に属する。この教育学的教訓に対する承認も、教育は

早期に着手すべきだという既述の教訓と共に、イザヤ書中に見出される。「それは教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則、ここにも少し、そこにも少し教えるのだ」。¹⁰²「教訓に教訓、規則に規則」のヘブル語、šaw lašaw, qaw laqaw, は「文字に文字」という意味にも解釈された。(šaw は  という文字の古い形であり、qaw は  の古い形だからである)。教育学的に言うなら、これは、まずアルファベットのの一つ一つの文字を教えることによって、読み方を教える方法を例証しているであろう。

大部分の教えは、口述で与えられた。「かれはわたしの耳をさまして、教をうけた者のように聞かせられる」。¹⁰³記憶を容易にするための記憶術の仕掛も、箴言31:10-31に例証されているとおり、用いられた。そのテキストにおいては、10節の冒頭の文字が  (A-leph) であり、あとの各節がアルファベットの一連の文字で始まり、 (Tav) で始まる31節に至るのである。

教えるための他の工夫は、たとえ (mašal) であった。これは、物語の中に視覚的表現をとった教えの一形態である。その物語は、通常、真理とか原理の適用とか或は論争点を類比によって生き活きと例証する比喻または寓話の形をとった。この用語 mašal は、もともとは詩的な託宣を指すのに用いられたらしいが、¹⁰⁴やがて類似を強調するために用いられたことわざ、あるいは謎の形の物語を指すようになった。¹⁰⁵旧約中のたとえば、道德教育のために用いられており、たとえを語りかけられた者が我知らずその教訓を理解するよう、明快な意味を伝達するために語られたのである。¹⁰⁶ダビデに対して巧妙につきつけられた譬えが予言者によって語られたものだということに注目するとたいへん興味深い。後には、mašal という語は、知恵教育のテキスト表題として用いられた。¹⁰⁷第二共和政時代の書記

97) 詩94:10, 12

98) 伝道 9:17

99) 出エ35:31-35

100) イザ28:9

101) イザ50:4, エレミ 33

「たえず教えたのに、エレミ 32:33) は MT 及び他の訳と共にこれを「字どおりに読むことにする。例えば、Moulton の訳「朝早く起きかゝるを教える」

102) イザ28:10

103) イザ50:4, 箴 1:8

104) e.g., バラムの託宣, 民. 23:7, RSV「講演」

105) サム上10:12

106) エゼ17:2

107) e.g. サム下12:1ff

108) 箴言 1:1, 「ソロモンの箴言」と訳されている書物の表題

と学者たちは、たとえを大いに用いた。その時代のタルムッドの文書のあらゆる箇所に譬えを見出すことができる。また、教えるさいの譬えの使用の普及ぶりは、イエスのさまざまな譬えのように、新約聖書で用いられたその譬えの広範な用例によって例証されている。

4 古代イスラエルにおける学力

旧約聖書によると、読み書きの能力は、万人が万人というわけではなかったが、他方それにもかかわらず殆んど完全にゆきわたっていた。ヨシュア記には、カナン¹⁰⁹の地図を書きしるすために各部族から出された三人についての記録がある。ギデオンは、手当り次第にスコテの若者をひとり捕えたが、その若者はギデオンのために町の重要人物たちの名前を書き記すことができた¹¹⁰。申命記によると、読み書きは普通のことのように見える。イスラエルの子どもたちは、神のことばを彼らの家の戸の柱と門の上に書くように命じられている¹¹¹。モーセもまた、トーラーのことばをしっくい¹¹²の塗られた石に書きしるすこと、その文字が誰にでも読めるほどの高さに書きしるすことを命じた¹¹³。イザヤによると、どんな子どもでも、少なくとも単純数や単位数を書きおろすことはできた¹¹⁴。トンネル完成のための純技術的な細部への関心だけを示すシロアム文字は、明かに労働者の一人、あるいはおそらくその工事計画担当の技師によって書かれたものであろう。従って、ヒゼキヤ(715-687B.C.)の時代には読み書き能力は完全にゆきわたっていたようだ。ラキシ文書及びペルシャ時代の後期エレファンタイン文書は、日常的業務における書くことの普及だけを示しているのではない。手書きに速い続き書き(いわば、行書体)への発展は、大衆による文字使用が非常に普及していたことをも示唆しているのである。第一マカベヤ書1:56¹¹⁵は、トーラーの写本が多くの

個人の家々に見出されたことを示している。大量のタルムッド文書は、その大部分が教師による律法の解説や討論の間に、生徒たちが採ったノートを編集し校訂したものであるが、そのことは、読み書き能力が第二共和政時代の後期には非常に高度なものに達していたことを示している。

VI むすび：神学的評価

以上、少しく紹介ばかりが冗漫になったようであるが、旧約世界の児童がおかれていた状況については、寡聞にしてこうした基本的文献さえまだそのままだで紹介されていないらしいので身近な幼児教育関係者の便宜をも考えて取て出来るだけ忠実に紹介した。

さて、これまでのところでひととおり触れてはきたが先を急ぐ都合上触れっぱなしにしてきた問題点もあれば、まだ触れ残している補遺もある。そこで、その問題点と補遺をいくつか拾いあげ、少しく神学的な検討を加えて結びとしたい。とはいえ、ここでもまた、おもにH.ハーグの所説²を紹介しながら私見を述べさせて頂くことをお断りしておく。

われわれは今まで、旧約世界の児童の姿をできるだけ包括的な状況の中で見てきた。しかし、その中にあって最後にわれわれの視線が焦点を結び得るのは親子関係における子どもの姿であることは言うまでもない。大状況の中で最後に結ばれる焦点として、親と子の関係の中の子どもの姿に神学的な光を当てて検討してみよう。

1 祝福の約束としての子ども

既に見たとおり、子どもの価値は、日常的实际面では、年齢差をもつ労働力として値づもりされた。しかし、聖書全体を貫いている神学的な光の中でみると、日常性とは別ないわば宗教的歴史的次元におけるとでも言うべき価値評価が見えてくる。

子どもの価値は、生命の価値によって決まる

VI

- 1) 日キ教団全国教会幼稚園連絡会編「新キリスト教幼児教育の原理」(1979)中の今橋朗氏の所説「旧約聖書の幼児理解」も、残念ながら簡略すぎる。
- 2) op. cit. pp. 153-159

109) イザ29:11

110) ヨシ18:4, 8-9

111) 士師 8:14

112) 申命 6:9

113) 同27:2-8

114) イザ10:19

115) 家々で、「発見された律法の巻物はすべて、ずたずたにひき裂かれて燃された。」

のである。生命は、旧約世界の人間にとっては神からの最高の賜物である。両親の生命は、その子供たちの中に継承される。かくて、子どもたちは、樂園喪失後における最初の両親に与えられた最初の慰めである。すなわち、生命が持続させられるという慰めにほかならない。³しかし、祭司典の明言しているところによれば、アダムはただ生命においてだけその初子へ移行していったのではなく、じつに神の似像としても移行していったのである。⁴この二重の意味における人間生命の持続を脅かすように襲いかかってくる洪水による神の審判すら、人間の生命の持続を問題として断とうとするものではない。なぜなら、ノアは、三人の息子らと彼らの妻たちを自分と一緒に箱舟に乗せるよう命じられたからである。⁵また洪水のあと、ノアの息子たちはノアと共に祝福と契約を受けているからである。⁶これらの章句の中に既に明瞭に認められるのは、救いの約束の担い手の子孫が、その担い手自身と全く同様に救いの賜物の受領者であるという思想である。しかも、この思想は、やがてイスラエルの上に具体化し、さらにダビデの家系に特別な仕方を実現していくのである。

このような神の救いの舞台としてのイスラエルの歴史の中においてみると、子どもは逆にその神の救いの約束としての賜物なのである。街の門に座した老人たちによって眺められる街路で遊ぶ子どもたちの姿がなぜ神のシオンへの来臨の時のしるしとして愛好されたかということも、そこから理解できるだろう。このエルサレムの街路の風景画に見られるように、旧約世界の人々にとって子どもは、日常的値積もりとは別に、いわば救済史的意味を担った存在として尊重されていたのであろう。すなわち、神はアダムの墮落にもかかわらず、祝福の基としてアブラハムとその裔を興こし、葦かごの幼な子モーセをとおして解放したイスラエルと契約

を結び、その背信にも拘らず放棄することなく約束を更新し、保持し、ついに必ず主の日に成就し給うという救済史的意味である。そして、そのような救済史的意味を担ったしるしとしての子どものイメージが最も鮮烈な表現をとったのが、あのイザヤによる「平和の君」としての「ひとりのみどりご」の誕生予言であろう。⁹「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。……万軍の主の熱心がこれをなされるのである」。

2 子どもの価値の重さとその相対化

前節の始めでも触れたとおり、父というものの生命は、それが子どもに継承される限りにおいてのみ意味をもつ。¹⁰それゆえに、子がないこと¹¹、またはひとり子の喪失¹²は、最も辛い犠牲なのである。息子というものは、彼の父の名を伝えて忘れられることがないようにその名を守るものである。¹³従って、息子の誕生と命名は、人とその妻の生涯にとって最も重要な出来事である。このことは特に長男の誕生、bekhôr すなわち「人の初子」¹⁵について言えることである。だから、旧約の記者たちは好んで初子をみごもったとき、生まれたとき、そして命名したときの父の年令を記録しているが、それは彼の名を興こすものが与えられることによって、彼の人生に新しい意味と将来とが開かれた時として、その年令を画期的たらしめるためであらう。だからと言って、子どもは父親だけの喜びだったのではない。否むしろ、子どもは、特に母親にとって最大の誇りだったのである。夫のヤコブを責め立てて、「わたしに子どもをください。さもないと、わたしは死にます」¹⁶と切願しているラケルの思いつめぶりをみても、それは明かである。いずれにせよ、当然なことながら、旧約世

3) 創世 4:1f.

4) 同 5:3

5) 創世 6:18, cf. 7:7, 8:18

6) 同 9:1, 8

7) cf. eg. 出エ12:24, 13:14-16

8) イザヤ11:8, セカ 8:5

9) イザ 9:6-7

10) 創世15:2f.

11) エレ16:2

12) 創世, 22:2

13) サム下18:18

14) 創世16:15, 21:2, 41-52

士師13:1-15-24 他

15) 創世49:3

16) 同30:1

界においても、リベカにとってのヤコブ¹⁷のように、ヤコブにとってのヨセフ¹⁸とベニヤミン¹⁹のように、またダビデにとってのアブサロム²⁰のように、両親にとっての子どもの価値は、他の世界のそれに比して勝るとも劣らない絶大な重さをもっていたことにまちがいない。

しかし、それにも拘らず、他の周辺世界と異なる旧約世界の特色は、そのように両親にとって殆んど絶対的ともいべき子どもの価値をも相対化し、殆んど中心的ともいべき子どもの位置を非中心化し得る視点をもっていることである。子どもをくださなければ「わたしは死にます」と言うほどのラケルにおける子どもの価値の絶対化を破るヤコブの言い分は、「あなたの胎に子どもをやどらせないのは神です。わたしが神に代ることができようか²¹」という一句である。神が全能で絶対の意志に基づいてすべてに関わってきているその関係は絶対で、人がもしその神の全能性と絶対性を自覚的に承認するなら、子どもの有無に関わる絶対性はおのずから相対化され、神との関係の絶対性と中心性を承認するなら、子どもの位置関係の中心性はおのずから非中心化されるのである。したがって、子どもの価値の絶対性を相対化し、子どもの位置関係の中心性を非中心化し得る視点の根拠は、ヤハウエ信仰にあると言ってよいだろう。そのヤハウエ信仰あるいはヤハウエ宗教に支えられてエルカナは、不妊のゆえに泣き悲しんでいる妻ハンナを慰めて言う、「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。どうして心に悲しむのか。わたしはあなたにとって十人の子どもよりもまざっているではないか²²」。また他方では、そのヤハウエ宗教のゆえに、神の人は、ヤハウエより自分の子らを尊んでいた祭司エリを「なにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊ぶのか²³」と非難した。このように、ヤハウエ宗教は、旧

約世界の親たちにとって絶対的な子どもの価値を相対化し、中心的な子どもの位置を非中心化させる視点であると共に力である。

3 親と子の人格的尊厳と罪の問題

前節の最後の章句（サムエル記上2：29）は親が自分の子らを「尊ぶこと²⁴」について旧約中で語られている唯一の章句である。しかも、ここでは、せつかくのその観念も否定される形で提示されているのである。通常、尊ばれるべきものとされているのは、むしろ両親の方である（出エ、20：12、平行記事、ミカ7：6）。前記のテキスト、すなわち、「あなたの父と母を敬え」等における動詞、kabad（敬え）は、もともと、ヘブル語聖書ではただヤハウエに言及する場合にのみ用いられた。もしくは、聖なる性格をもつ人格や事物に言及する場合にのみ用いられた語である。従って、ここでも、子どもにとっての両親を聖なる領域に属するものとして区別するためにこの語が用いられていると言ってよいだろう。子どもは、両親を聖なる領域に属するものとして、神に対すると同じように敬い決してのろってはならない。親は親で、神がイスラエルに対して憐み深い父であるように、子どもに対して憐み深い親としてその養育に心を砕かなければならない。つまり、モーセの十戒の第一戒に準ずるものとして第五戒が位置づけられているように、ヤハウエとイスラエルの関係が親と子の関係の原型なのである。それゆえに、親に対してはもっぱら「敬うこと」が子に求められ、子に対してはもっぱら「憐み深くあること」が親に求められるのであろう。

24) 動詞kabad→名詞kabhedh

25) 出エ、21：15、17

26) 詩103：13、マラキ3：17

27) この原型的関係は、みなしごにまで適用される。

E. Hoffmannは言っている。「みなしごに対する配慮は聖書の世界では、いずれの時代にも重大な関心事であった。旧約においては、特に申命記（10：18、26：12、27：19等）がみなしごに対するこの義務を宣揚している。神がその父であるがゆえに、生活力なき孤児たちを保護しないイスラエルの義務不履行は予言者の非難の根本理由になっている（イザ1：23、10：2、エゼ22：7f、マラキ3：5）」Kinderfürsorge (RGG. Bd III. s. 1274)

17) 創世25：28、27：1-45

18) 同37：3-4、34-35、45：26-28

19) 同42：38、44：20、30f

20) サム下18：5、18：28-19：6

21) 創世、30：2

22) サム上1：8

23) 同2：29

だが、そのことは、子どもの人格的尊厳が認めめられないということではない。かえって、前二節でみてきたような生命継承と家名継承における親と子の血の連帯性にもかかわらず、子には親たちの罪に対する責任はないという人格的個人原理が既に見出される。²⁸しかも、この原理の成立は申命記より遅くはない。むしろ、それよりはるかに早い時期に成立していたであろう。「父は子のゆえに殺さるべきではない。子は父のゆえに殺さるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺さるべきである」という申命記の一句は、既に定式化されたものの²⁹ように響くが、古代近東世界に一般だったらしい犯罪に対する血族的社会的連帯責任制を破棄し、父をも子をも独立した人格的個人としてその尊厳を守る道を開いた。現に、列王記を編集した申命記的歴史記者によれば、ユダの王アマジャ（前 800—783年）は、この一句に基づいて、殺害者たちの子³⁰を殺さなかったのだと伝えられている。さらに意味深いのはエレミヤの予言である。「その時彼らはもはや、『父がすっぱいぶどうを食べたので、子どもの歯がうく』とは言わない。人はめいめい自分の罪によって死ぬ」。ここでは既に、罪の遺伝的理解は克服されているといつてよいだろう。いわんや、性悪説をや、と言えないであろうか。

しかし、罪に対する血族的社会的連帯責任制の破棄と人格的個人責任の強調は、罪に対する意識を稀薄にするものではない。かえってそれを深めるものだ。聖書記者たちは、あの聖なる領域に属するものとして区別されている親たちの「人間的弱さ」についても、冷静に直視している。いや、人間的弱さなどというよりむしろその非人間性は、甚しい困窮の時代には親が自らの子を喰い、子がその親を喰うほどにまでなる³¹恐るべき姿をさえ直視している。³²

つまり、旧約の親と子は、ただ神の戒命によってだけそれぞれ人格的尊厳を保証されてはいるが、彼ら自身においてはたえず自らの罪に脅かされつつ究極の癒しと解放を待ち望んでいるのだと見てよいだろう。それは決して、自らを自らの手で救い完成し得る自己完結的な世界でも関係でもあり得ない。

旧約聖書とその歴史の中に、親であれ子であれ旧約世界のあらゆる人間のユニフォーム姿として提示されている姿だと言って、フォン・ラートが次のように述べているとおりである。

「人は、どこにあって、神に反抗する準備をし、神から背き去る準備をしている。だから、人は、いつでもゆるしを必要とし、神の助けを必要としている。じつにただ稀有なこととしてだけ、せいぜい自分自身の本性に逆らっただけ与えられた救いの関係を受け入れてその中へと入って行く信仰、服従、³⁴明渡しという特別な出来事が起こるのである」。

4 教育責任における宗教的二重構造

すでに見てきたように、古代近東世界にあっては、子どもに対して厳しい訓練、いわゆる鞭による教育が一般に推奨された。古代イスラエルにおいても、まったく同様に、子どもたちには厳格な訓練が施されるべきだと論じられている。³⁵だから、形式上は、古代イスラエルは古代近東世界の一部であって、その鞭による教育、所謂硬教育も、古代近東世界に一般的な教育方法のイスラエル版で、古代という時代的制約以外には、イスラエルの独自性など一応どこにもないと言ってよかろう。その意味では、硬教育が推奨された理由の一つとして当時における教育思想と教授方法の素朴さをあげた平塚氏の、いわば時代制約説は支持されよう。

しかし、古代近東世界における硬教育の見せかけの一枚岩を内側から破るような、子どもの処置方法でさらに異常な厳しさを示すケースが古代イスラエルから報告される。それによれば、

28) 申命24:16、歴代下25:4、ヨブ21:19、エレ31:29f、エゼ18:2

29) cf. 歴代下25:4, S.R. Driver, DEUTERONOMY. pp. 277—278

30) エス、9:13f, Herodotos iii, 119 ダニ、6:24f

31) 列王下14:1—7

32) レビ26:29、申命28:53—57、

列王下 6:28f、エレ19:9

33) エゼ 5:10

34) G. von Rad, OLD TESTAMENT THEOLOGY VOL. II, p. 348

35) 箴、13:24, 19:18, 29:17.

両親は、互いに相談して一致したなら、手に負えない反抗的な子を死によって罰するため町の長老たちの前に連れていかなければならない、というじつに異常なほど厳しい勧告である。勿論、この勧告どおり親が子を告発するというようなことは、エリが息子たちの冒瀆的罪を秘して告発しなかったように、³⁶ 実際に移されるようなことは殆んどなかったのかも知れない。しかし、そのエリの秘匿と放任の罪は、肯定も放置もされないどころか、その聖なる祭司の職務を取り去ってエリの全家を永久に棄却する審きの理由にされたのである。³⁷ 申命記で勧告されている親は、古代ローマの親のように子に対する生殺権を持っていたわけではない。³⁸ 彼らの告発は何らかの体罰をも用いて行なった彼らの教育がゆきづまったとき、長老と全イスラエルの手に子どもを委ねるのであって、それは飽くまでも教育的動機に貫かれた教育上の告発である。従って、この勧告は、古代イスラエルにおける教育についての考え方の厳しさを示していると共に、子どもに対する教育責任は親だけが自己完結的に負うべきものでなく、究極的にはイスラエル共同体の共同責任としてその手に委ねらるべき開かれたものとして考えられていることを示している。ここに即ち、教育責任における宗教的二重構造がうかがわれるのである。

宗教的とは、神との関係を基軸としてまずそこから教育責任が考えられているからである。たとえば、「自分の父または母をのろう者は、必ず殺さなければならない」という法は、³⁹ A. アルトの分類によれば、⁴⁰ 恐らく砂漠時代にまでさかのぼるイスラエル固有の法の典型とされているが、その根拠は、法の断言的形式にあると共に内容的にはその宗教的性格にあるという。神との関係を何にもまして基軸とする宗教的法に

おいては、カナン侵入後採用されたという具体的な民事の判例集ともいうべきカズイスティックな形式の法とちがって、「のろう」という人間の肉体的領域に属する行為も死に価する罪として問題化されるのである。そうであるなら、トーラーに基づきトーラーを主たる内容とした古代イスラエルの教育が内面まで問題にする厳しさをもっていたのはむしろ当然であろう。問題の「愚かなことが子供の心の中につながれている。懲らしめのむちは、これを遠く追いだす」という知恵の所謂「硬教育」の思想も、その包括的前提たるイスラエル固有の宗教的法の精神から理解さるべきであって、所謂「性悪説」などという東洋的通俗観念によって割り切られてはならないだろう。

古代イスラエルにおける教育責任の二重構造も、その神とイスラエルの宗教的關係を基軸として成り立っているのである。すなわち、旧約世界においては、前節でみた人格的個人の原理の成立にも拘らず、たんなる人間、たんなる個人というものは語られておらず、必らずイスラエル（またはその敵）の成員としての人間また個人のことが語られているのである。⁴¹ 子どものこと、特にその教育のことが語られるときにも同様である。教育の課題は、子どもに単なる一般教養を与えることではなく、⁴² 家族の一員であると共に全イスラエルの成員としての務めに必要な知恵と技術の訓練であった。そして、その家族共同体とイスラエル民族共同体との双方における教育と訓練との全体を包括的に基礎づけ結び合わせ目標づけるのがトーラーである。そして、この古代イスラエルにおける教育の包括的枠組みは、子どもの教育が理想的にいっている場合にだけ機能するのでなく、まずくいった

36) 申命21:18-21

37) サム上 3:13

38) S. R. Driver, op. cit. pp. 247-248

39) サム上 3:13-14

40) S. R. Driver, op. cit. ibi.

41) 出エ21:17

42) A. Alt, Die Ursprünge des israelitischen Rechts, 関根正雄, 「イスラエル宗教文化史」 pp. 51-55

43) 箴22:15, cf 22:6, 松田明三郎教授は、この一節の性格について、「宗教的指導と道徳的訓練を主としたもののように響く」と言っている。「箴言」396-397頁

44) G. von Rad op. cit. p. 348

45) 古代イスラエルにおいては、家族、親族、部族の三つの集団規模が認められるが、その区別は明確でなく、民族を親族とよび、政治的結合をも一家とよんでいる。cf. F. Horst, Familie (RGG, Bd. II)

場合にも機能するものなのである。すなわち、申命記の勧告が指向しているように、たとえ両親による教育が破綻しても自己完結的に自裁されることなく、破綻がそのままイスラエル共同体の共同責任として受けとめられ、やがて全イスラエルは、ヤハウェによる回復と教育とを仰ぎ待つのである。

しかも、このような教育の破綻は、旧約聖書の語っているところによれば、たんにある両親だけの経験ではなく、旧約世界の民全体の歴史経験である。それゆえに、旧約聖書の最後の章句たるマラキ書4：5－6が語っている予言は旧約聖書のあらゆる父と子を包含する全イスラエルとその惨憺たる教育破綻の歴史にとって、いかに畏れと慰めとに満ちた約束であったろうか。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前にわたしは予言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。

参 考 文 献 (括弧内は略号)

- K. Galling, Hg., Die Religion in Geschichte und Gegenwart (R. G. G). Familie (Bd III, F. Horst), Kinderfürsorge (Bd. III, E. Hoffmann), Pädagogik (Bd. V, H. Barion)
- H. W. Wolff; Anthropologie des Alten Testaments, in Engeish. Tr. by M. Kohl, 1973
- G. J. Botterweck, H. Ringgren; Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament, (T. W. A. T) Vol. II
in En. Tr. by J. T. Willis 1975
- H. Haag; Art. bēn P. 145－159
- G. A. Buttrick; The Interpreter's Dictionary of The Bible, (I. D. B) Vol. I, II 1962
- O. J. Baab; Art. Child
- J. Kaster; Art. Education, OT
- G. von Rad; Theologie des Alten Testaments Bd II, Die Theologie der prophetischen Überlieferungen Israels.
in En. Tr. by D. M. G. Stalker 1973

- H. W. Robinson; The Christian Doctrine of man 1958
- S. R. Driver; Deuteronomy (I. C. C.) 1960
- K. Elliger; Leviticus
- W. Eichrodt; Das menschenverständnis des Alten Testaments
in En. Tr. by G. Smith 1972
- A. Alt; Die Ursprung des israelitischen Rechts 1934
- W. F. Albright; Bulletin of the American Schools of Oriental Research (BASOR) No. 86, 92, 1943
- 平塚益徳：旧約聖書の教育思想 1957
- 関根正雄；イスラエル宗教文化史 1952
- 関根正雄・内田芳明；旧約宗教の社会学的背景 1954
ウェーバー「古代ユダヤ教」研究
- 松田明三郎；箴言－私訳と注解 1967